俺の周囲は人外ばかり

斉藤雅夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の周囲は人外ばかり

【Ｎコード】
Ｎ０１９２Ｚ

【作者名】
斉藤雅夫

【あらすじ】
俺の周りにはまともな人間が一人もいない。転校してきた宇宙人に暴力主義者のドＳ超能力者に性転換した幼馴染に幽霊の貞子ときやがる。俺の周りには普通の美少女はいないのか！？　痛恨人外ラブコメディ、ここに颯爽登場。

第一話　『ＡＢＤＵＣＴＩＯＮ』

ＵＦＯは存在するかどうか世界各地で議論しているであろう今日この頃。

俺はＵＦＯを発見した。

いや正確には円盤型飛行物体が俺の真上を浮かんでいる。

なんだあれ。

黒い飛行物体。闇に紛れた飛行物体。俺の１８年の人生経験初めて見る飛行物体。

なんだこれ。

俺の周囲が赤く染まった。飛行物体に照らされているのだ。

飛行物体を見上げて状況確認をしたかったが、駄目だ。眩しくて網膜がやられた。ラピュタ風に言えばバルスを喰らった直後だ。目が、目がああああぁぁぁぁぁああ。

赤いサークルから出る。視力が回復をするのを待つ。クソッ、こんな事なら近道である山道を通らないで大通りから素直にスーパーへ向かうべきだった。

今年は最悪だ。幼馴染の双葉優希が二日前に突然行方不明なるし、一ヶ月前には学園に住みつく幽霊が俺に憑りついて、入学式に何故か新入生の女子にライダーキックをされ、挙句の果てには宇宙人ですか。俺は何処のライトノベルの主人公だよ。もうお腹一杯なんだよ。俺にしか見えない幽霊の所為で、俺は『重い精神病を患った大学受験生』の称号をドＳ後輩から授かったのに、今日はＵＦＯ？ハッキリ言って迷惑。幽霊が出ている時点でライトノベル的には幽霊や妖怪、怪異の話に持っていかなくてはならんのに世界観ごちゃ混ぜか。一つのテーマに集中しなければ話は面白くならん。さっさと書き直せ！

なんてくだらない妄想をしていると、飛行物体Ｘから何かが降りてきた。

赤い光の中心から何かが降りて来る。人だ。多分人だ。シルエット的に人だ。
もしくはダッチワイフだ（ダッチワイフを何も考えずに見ていると狼の神様を連想するのは俺だけか？　わっちウルフ）。
うわぁ。こんな展開あるんだな。これはあれか、電波的な彼女と青春したい少年のｉｆストーリー。
ま、んなこと考えないで落ちてきた人を助けるか。どうやらあの人、気を失っているようだ。解剖されたのかな。やっぱり記憶操作をされて帰されるんだろうな。
それにしても宇宙の技術は凄いな。何かで吊るしている様子も無くゆっくり人が落ちてくる。重力キャンセラーとか中二的要素の技術かな。
しばらくして人が肉眼で確認できるまで迫って来た。……て、
「ただ単に紐で吊るしているだけじゃねえか！！」
降りて来る人はただ数本の紐に吊るされていただけだった。宇宙のオーバーテクノロジーなんか関係ない。ただの大道芸やワイヤーアクションみたいな演劇レベルの工作だ。
しかも、
「なんで行方不明の優希が落ちてくんねん！！」
なんということでしょう。空に浮かぶ円盤型飛行物体から、幼馴染の少年である双葉優希が全裸で落ちて来たではありませんか。
おい、宇宙人。幾ら何でも酷いだろ。身体を弄繰り回したのなら服を着させて何事も無かったかのように戻すのが基本だろ。
仕方ないので優希を両手で受け止める。やっぱり軽い。やはり学園最少身長を誇る１４１ｃｍの男子だな（紐は知らぬ間に無くなっていた。ある意味あの紐はオーバーテクノロジーだったのかもしれない）。
「柔らけー。これが女だったら役得だった……の、に」
無い。無い無い。無い無い無い無い。無い無い無い無い無い無い無い無い！！

男のシンボル♂が無い！！
「なんっっっじゃ、こりゃあああああああ！！」
足の間にあるべきキノコが存在しなかった。逆に〇〇〇が股の間にあった。
目線を移動させると、優希の胸が若干大きくなったようなそうでもないような。
……もみもみ。
「――んっ！　あぁん」
あ、結構柔らかい。見た目じゃわからないけど成長しているようだ。
だがしかし、俺の手は悴（かじか）んでいて感覚が鈍い。人生最大の失敗だ。こんな事なら手袋をして手を温めておくべきだった。
予測だが、これは円盤型飛行物体に少なからず関係があるのは間違いないだろう。中学の修学旅行時には小さいながらも可愛らしいシンボルを供え持っていた優希の股はツルツル。……もしかしたらこれは優希ではないのではないか？　これは優希に似た少女である可能性も否定できない。
しかしこれは、なんという状況だろう。
見た目小学生の裸一貫女子をお姫様抱っこで持っている男子高校生。
うん、間違いなく通報ものだ。これで警察を呼ばれても言い訳が出来ん。だけどロリコンでもある俺には目の抱擁だぜ。
「でも優希に似ているからなんか萎える」
こいつの身体は俺好みだ。
だけど目のやり場が困る。裸の少女の姿はロリコンは目に毒だ。しょうがない。ここで襲っても傷付くだけだ。本当に優希が女になって親友に犯されるなんてどんなエロゲーだよ。鬼畜系の。
それに俺、Ｙｅｓロリータ、Ｎｏタッチを信条にしているから。ロリには無害のロリコンを目指す。
「……つか、さ」

「よう。久しぶりだな優希。記憶あるか？」
間違いない。こいつは優希だ。俺の名前を、司と言った。
優希は眠たそうに目を半開きのまま俺のことを見つめる。おいおい、こんな可愛い子に見つめられたら照れちまうよ。
「なんだ、か、寒い」
「そりゃお前が裸だからだろ」
「そ……っか。Ｚｚｚ……」
寝てしまった。この初冬を迎えた季節に裸一貫は寒いだろう。一応今は女なので俺のパーカーを着させる。男だったら絶対着させぬ。おお、ぶかぶかの服を着る少女みたいで可愛いな。親友じゃなかったら襲っちまうぜ。
そんな冗談はさておき。これからどうしよう。本当に宇宙人が優希を性転換したのなら、これは大事件だ。
宇宙人が実在して、しかも人間を性転換させられる技術を有している。ダブルで大ニュース。更に半裸の少女を抱きかかえている俺は即逮捕。
いかんいかんいかん！　逮捕だけはいかん！　いや逮捕までは行かなくても補導はされるな。
……今気が付いた。俺、優希の家知らないんだよな。
つい最近優希の母親が再婚して、新しい家に引っ越したんだよな。確か再婚が理由で失踪したって噂が流れている。
事実、俺もそうだと信じていた。失踪数日前から新しくできる家族に不安を漏らしていた。
そしたらこうだよ。こんな感じだよ！　ものすごく可愛い寝顔で俺の腕の中だよ！　も一度言うけど役得だよ！！
ここで迷っていても何も始まらない。俺ん家に連れて行くか。
と、ここで俺は重大な事を思いだす。
突然現れたＵＦＯに、アブダクションされた挙句に性転換手術をされた親友を見て忘れていた。
「スーパーのタイムセールに間に合わない……」

半裸の優希をここに置いて行くのも連れて行くのも危ないので、タイムセールは諦めて家に引き返す事にした。
一人暮らしの貧乏学生には大切なタイムセール。食費が浮くタイムセール。ちょっと高級なものが安くなって食事が豪華になるタイムセール。
でもまあいいだろう。今日は行方不明の親友が帰って来たから良しとしよう。
『おかえりなさい、ご主人様。食事にします？　お風呂にします？　そ・れ・と・も、私を風呂場で召し上がります？』
玄関先でメイド服を着た黒髪が目元まで伸びているのが特長の少女が出迎えた。
ふわりと浮いて。
地に足付かず、身体が透けて見える少女、霊泉佐多子。
彼女は一か月前の学園屋上で見つけた。否、見つけてしまった。
学園の七不思議にカウントされている『屋上の貞子』。それがこいつだ。
佐多子は約十年前、虐めが原因で学園から投身自殺。クラスメイトを自分の命と引き換えに人生のドン底に突き落とした。
それがサダコ。俺だけが知っている俺だけが見える幽霊。んでメインヒロイン候補。
「黙れ佐多子。触れることすらできない幽霊はお呼びじゃねえ。普通ラノベの幽霊は主人公には触れる設定だろ」
『それなら司さんは主人公ではないのですか？』
「いや、お前はヒロイン外なんじゃね？　漫画で言う一話限り登場の幽霊」
『失礼しちゃいますね。ばいんばいんのないすばでーの女の子をヒロインにしないなんて。作者は病気ですか？』
「嘘を読者や編集者に伝えるな。骨と皮でできているような身体の癖に」
『そんなに痩せていません！　確かに一般人に比べて肉は少ないで

すけど、骨が浮き出るほどではありません！』
「幽霊に肉なんて無いだろ……」
最近こいつの体の仕組みが良く分からない。服装は自由自在に変えられ、髪型や体系を変えることが出来る。初めて会った時は拒食症患者のように痩せこけ、白人の死体のような白い肌。本物の幽霊貞子だった。
しかし今は普通の人間並みになった。
だが肝心の胸は全く大きくならず、俺的には非常にガッカリした。
ここで読者様に誤解の無い様に言うが、俺はパイオツニアだおっぱいを愛し、おっぱいに一生を捧げる云わばおっぱいの神様とクラスの男子から呼ばれる。
まあ正直女なら年齢が上でも下でも胸が大きくても小さくても痩せていても太っていても尻の形が良かろうと悪かろうと髪が坊主からアフロまでも、俺が性的興奮を覚える物ならなんでもイケる。
『所謂雑食ですね』
「流石に幽霊は食えん。視覚と聴覚だけの存在なんて興奮できない」
『まったく、私の気持ちも知らないで。――話は変わりますが、なんで双葉さんは半裸で気絶しているんですか？』
「今更かよ。反応遅くない？」
服装が俺のパーカーのみの優希を見た佐多子は、俺と優希を交互に見てテンションが下がった。
『……そうだったんですね。やっとわかりました。幾ら私が過激なコスチュームに身を纏っても相手にされない理由がようやくわかりました』
突然佐多子がヨヨヨと崩れ落ちた。地中に。
地中に沈んだ佐多子を無視して、寝室に優希を連れて行った。
冷凍庫に在った冷凍うどんを解凍して、身体が冷え切っているであろう優希に温かいうどんを用意する。お湯を沸かしている最中に佐多子が地中から復活。
『シュワッチ！』とウルトラマンの変身シーンのようなポーズで上

がって来た。
『私は諦めませんよ！　例え司さんがホモで同性愛者でショタコンでも私は諦めない！　どんな手を使っても、司さんを殺して、晴れて幽霊となった司さんを私が婿にします！！』
「色々とツッコム所があるが、俺は少なくともホモではない。男を性的対象とは認識しない」
『嘘を吐かないでください！　双葉さんの尻と胸を抱きかかえながらさりげなく触っていたのが何よりの証拠！！』
あーこいつ優希が女になったのを知らないのか。説明するのも面倒だし、実際に見せつけた方が良いな。
『司さん……死んでください……』
佐多子は先程ネギを切っていた包丁と思わしきものを握っていた。
それをおもむろに俺の方に向ける。
「お、おい、マジかよお前……俺を、殺す気か？」
一歩、また一歩と後退りをする俺に合わせて佐多子も距離を保ったまま近づいてくる。
『……貴方が悪いんです。いつまでも私の気持ちに応えてくれない貴方が。そして、男に走った貴方が……』
スッと俺の胸に佐多子が持つ包丁が突き刺さっていた。
気付かなかった。俺が刺されている事も、佐多子が刺した事も。
俺は台所で仰向けに倒れ、最後の時を迎えた。嗚呼、俺は幽霊に刺されて死んだのか。せめて高校卒業までは生きたかったな。
『大丈夫ですよ、司さん。死んだら天国で末永く過ごしましょうね』
重くなった瞼を閉じて、俺は深く、永遠に続く眠りへ旅立った。

最終話《新たなる旅立ち》完

「ま、嘘なんだけどね」
普通に起き上がり、水が沸き上がった鍋にうどんをぶち込む。
最初に言ったろ。佐多子は物に触れない。つーことは包丁を持つ

ことは不可能。あの包丁は佐多子が具現化した空想の物の一つ。これは佐多子と俺のやる暇潰しの即興演技。傍目からすれば一人でパイントマイムをしてるだけ。一度他人にこういうやり取りをして、精神的障害の何かと勘違いされたことがあった。

つまり人畜無害な幽霊。ポルターガイストの一つも出来ないヘッポコ幽霊。

『本当に殺せたらいいのに……』

なんつー恐ろしい事を考えているんだ。恐ろしくて夜も眠れん。

佐多子が俺を殺したがっているのは、俺と結婚するためだと。

物に触れられず、ただ見るだけしかできない佐多子は、まだこの世にやり残したことが一つあり、成仏が出来なかった。

佐多子の姿を見た者はその場を立ち去り、誰にも相手にされんかった。

そんな時に怖いもの知らずの俺が、佐多子と出会って成仏の手助けをした。無事にやり残したことが終わったが、もう一つやり残したことが出来た。

俺を婿とすることだ。

どうやら佐多子は本気で俺に惚れているらしい。

これが生身の人間だったら、刹那の速さで結婚しているんだけど（どっちにしろ俺は誕生日になっていないから結婚はできない）死人で幽霊で物理干渉は無理な相手とは結婚所か付き合う事も出来ない。せめて性交渉が出来ればな。

『心の恋人はどうでしょう』

「人の心を勝手に読むな。盛り着いた男子高校生に我慢しろっていうのか」

『そんなこと言って司さんは性欲が少ないではないですか。意外とそっち系の漫画も純愛系が多いですし』

「俺の部屋に入るなと警告しただろ！！　何で俺の秘蔵コレクションの内容を知っている！！」

『だって気になりませんか？　異性が部屋で何をやっているか』

「そんなもの気になら――なります！」
見たいに決まっているだろ。異性の部屋。人形が一杯の部屋。甘い匂いが漂っている部屋。御パンツ様が収納されているタンス。欲望に従順な俺ならば、入室直後にベッドへダイブだ。ベッドの匂いを堪能した後、お待ちかねのパンティー鑑賞タイムさ。
『司さん、声に出てますよ。流石にそれは私でも引きます』
しまった！　俺の欲望が声に出てしまった！！
『それに伸二さんは勘違いしています。女子の部屋は大概汚いものですよ。伸二さんのように毎日こまめに掃除するのは珍しいです』
「知っているよ、そんなこと……。いいじゃないか、女の子の部屋に夢や希望を持ってたってさ……」
どうして現実を教えるんだ。夢くらい見たっていいじゃないか。だってまだ思春期だもの！！
茹で上がったうどんを器に移して、温かいスープを注ぎ込んで、最後にネギをトッピング。うむ、いつも通り美味しそうなうどんの完成だ。バイトの給料前はいつもこれで飢えを凌いでいる。冷凍食品で格段に安いうどんは我が家の必需品の一つだ。
出来上がったうどんを持って優希が眠る寝室へ行く。
ベッドの上には、勇気が幸せそうな表情でぐっすり眠る姿があった。なんだか起こしたら勿体無いような気がする。
「……司の……匂い……良い……」
いや、俺は一体どうすればいいんだ？　一応今は少女でも、中身は男の優希に言われると思うと一気に冷める。
『ここは殺すの一択です。私だって司さんの匂い嗅ぎたいのに……』
隣ではヤンデレ少女が物騒で危ない戯言を提案。つーか何で君の頭には殺す発想しかないんだよ。
ここは無難に起こすという選択肢を実行。
「起きろ優希。飯出来たぞ」
軽く優希の頬を叩いて目を覚まさせる。虚ろながらも意識が覚醒した優希を確認する。意外に優希の頬が生まれたての赤ちゃんみた

いに柔らかかった。もしかしたら体を女性に改造されて、更に肌も若々しくしたのかもしれない。
「うん……司、おはよう」
「おはよう。ほれ、腹減ってるだろ。これでも食え」
少々寝ぼけている優希の前にうどんを差し出す。優希が両手で受け取り、自分の膝の上に乗せる。うどんがちゃんと安定しているのを確認すして、優希に割り箸を渡す。家は貧乏だから来客用の端など一つも無い。
「えへへ。ありがとう司。丁度腹が減ってたんだ。じゃあ遠慮なく頂くね」
なんて可愛らしく微笑んで、ちゅるるんと二，三本の麺をすする。く、これが優希でなければ襲ってやるのに！！
三分の一ほど消費して、優希は完全に目が覚めたのか俺の瞳を見つめる。
「どうして僕ここに居るの？　確か僕、家出してから司の家に向かおうとして……駄目、思い出せない」
どうやら優希は宇宙人に記憶を改ざんされたのか、或いは連れ去ってからずっと寝ていたの二択のようだ。記憶が無い。
「そうだ。僕、なんで司のパーカーを着て、司のベッドで寝ているの？」
「……取り敢えず食え。うどんが覚めたら食べづらいだろ。食ってら最初から話してやる」
そう言うと優希は従順に「分かった」とうどんを食べるのを再開した。
『あぁ。私も司さんのベッドで看護されながら手作りのうどんを食べたい。その後はお返しに、私を食・べ・て♪　なんてきゃーーーー！！』
隣の幽霊が騒がしいけど我慢だ。こいつの姿は優希には見えないから、独り言みたいに見えてしまう。
ほどなくして勇気が食い終わったのを確認して食器を返してもら

う。驚きのあまり割って貰ってはたまらんからな。
「さて優希。お前は本当にここまで来た経緯が分からないのか？」
「うん。まったく覚えてない。最後に何か赤い光に包まれたくらいしか」
間違いない。こいつは完全にアブダクションに会っている。本物の宇宙人にさらわれて、体も改造されるなんて不憫な奴だ。俺だったら自分が女になったって分かった瞬間自殺する。
「……落ち着いて聞いてくれ優希。実はお前、宇宙人にさらわれていたんだ」
「またまた冗談を。幾ら僕の頭が弱いからって、宇宙人を信じるわけないだろ」
ケラケラ笑って俺の言葉を全く信じていない優希。当たり前か。しかしお前はこの後知る現実に耐えられるのか？
「ちょっとなんで黙ってるの？　早く何でここに居るか真剣に答えてよ」
俺はすんごく真剣なんだが。まあ事が事だけに現実味が無いもんな。なら現実を叩きつけてやんよ。
「ならお前、自分の股間に手を当てて聞いてみろ」
「え？　ここは自分の胸じゃないの？」
「いや、股間で合ってる。さっさとしろ」
優希は恥ずかしそうに股間に手を当ててみると、異変に気付いたようだ。その通りだよ。お前は外見が全て女の子らしくなったんだよ。完璧な。
「んぁっ！　なんだこれ？　気持ちいい……」
あれ？　なんだか反応が違うぞ？　ここは「なんじゃこりゃあああ！」とか「チ〇チ〇がねえええええ！」だろ。何俺のベッドの上で女の性に目覚めてるんだよ！！
「あれ？　なんだか頭がフワフワする。気持ち、いくて、意識が飛びそぅ」
目がトローンと蕩(とろ)けている。まずい、これではＲ１８に規制され

かねん。
「ストップ温暖化！！　気持ちいいのは分かったから、ここで一つ確認。お前、男だよな？」
「ぁあ。ぅん。そぅだよ。……ハァ、……ハァ」
「ならなんで、男のシンボルが無いんだ？」
突然優希は自分の股を擦るのを停止した。そして、思い出した。
自分が男のはずなのに、男のアレが無い事を。
「なんじゃこりゃあああああ！　チ○チ○がねえええええええ！！」
期待通りのリアクション、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0192z/

俺の周囲は人外ばかり

2011年11月30日22時47分発行